

## 唐詩に見る桃花源

——非充足の快樂——

一一一

松本 肇

### 一 はじめに

満ち足りた状態を美しいと感じる。それは美意識のひとつであるにすぎない。澤田正子『源氏物語の美意識』（笠間書院、一九七九）によると、『源氏物語』には、非充足的な美の存在が顯著であるという。非充足の美とは何か。次のように述べている。

それは花やぎ、さかり、という満ち足りた状態からそれ、やつれ、衰え、冷えたイメージをもつものであり、いわば“消え”への志向の強いものである。（四六頁）

「非充足の美」については、すでに小西甚一氏が觸れており、それを展開させたのが澤田氏の著作である。右の指摘は、中國文學には當てはまらないであろうか。市川桃子氏は、「古典詩の中のはず——荷衰へ芙蓉死す——」（『日本中國學會報』第四二集、一九九〇）で、齊の謝朓を、衰荷の景の發見者と呼んでいる。衰えたはずに美を認める傾向は、“消え”への志向の強いものと言えるだろう。

私は以下で、唐詩に見る桃花源について考察する。桃花源に關しては、すでに多くの議論がある。ここでは、「非充足」という視點から桃花源の詩をとらえ、中國文學の新しい傾向を發掘してみたい。「非

充足の美」という見方は、日本の中世文學研究から借りた概念であるけれども、ほかにふさわしいことばが見つからないので、そのまま借用することにした。ただし、私はそれを人間の内面の問題にまで擴大して考えるつもりなので、これからは「非充足の快樂」ということばを用いる。充足しない状態に價値を認める傾向、という意味である。

### 二 唐代以前の桃花源

桃花源の物語は、陶淵明「桃花源記并詩」（『陶淵明集』卷六）に載っている。晉の太元間に武陵の漁師が桃の林に出會い、林の奥の山の入口から村落に迷いこむ。ここでは、秦の戰亂を避けた人々の子孫が、外界と隔絶した暮らしを營んでいた。漁師は村人の接待を受けて、數日留まった。漁師が村を出るとき、目印をつけておいたが、けっきょく道に迷って、二度と訪れることはできなかつた、というものである。

唐詩の桃花源を見る前に、唐代以前の桃花源について觸れておこう。沼口勝「庾信の詩と『桃花源』——『擬詠懷詩』における喪失感——」（東京教育大學『漢文學會々報』第二八號、一九六九）によれば、桃花源の像を自己の作品に取り入れた、最も早い詩人は、北周の

庾信である。庾信の詩に見える桃花源がどのように用いられているかを、沼口氏の論文に基づいて整理すると、次のようになる。

### 1 環境の美化

逍遙遊桂苑

逍遙して桂苑に遊び

寂絶到桃源

寂絶 桃源に到る

〔詠畫屏風詩二十四首〕其四、『庾子山集』卷四)

右の詩では、「桃源」は美しい庭園の比喩に用いられている。

### 2 喪われた願望の象徴

更尋終不見

更に尋ぬるも終に見えず

無異桃源

桃花源に異なる無し

〔徐報使來止得一見〕、『庾子山集』卷四)

徐陵が北周を訪問したときの作。もう一度會いたいと思っただが、もう會えないの意。空しさの感覺を表わしている。

### 3 異郷のたとえ

行人忽枉道

行人 忽ち道を枉げ

直進桃源

直ちに桃花源に進む

〔奉報趙王惠酒〕、『庾子山集』卷四)

行人は庾信、桃花源は北周をいう。梁末の戦亂を逃れてきた自己の境涯への嘆きを託している。

庾信の詩では、異郷を「桃花源」と表現した3の用例に注意する必要があるだろう。表面的には「桃花源」ということばで北周を美化しているが、そこは決して安らぎの場所ではあり得ない。

このほかには、「桃源驚往客、雀嶠斷來賓」(陳・徐陵「山齋」、『徐孝穆集』卷一)のように、静かな山の書齋を詠じるもの、「今日桃源客、相顧失歸塗」(隋・孔德紹「登白馬山護明寺詩」、遼欽立輯校『先

秦漢魏晉南北朝詩』隋詩卷六、中華書局、一九八三)のように、景色のよい山に登ることを歌うものなどがある。

### 三 唐詩における桃花源の表象

唐詩における桃花源については、范之麟・吳庚舜主編『全唐詩典故辭典』下(湖北辭書出版社、一九八九)の「桃花源(桃源、桃花源、桃花、花源)」の項で、七十八の用例を擧げて、具體的に比喩の内容などを説明している。いま、それを参考にしながら、桃花源の像について検討してみたい。桃花源は大きく分ければ、理想の世界を表わす場合と、望ましくない場所を表わす場合がある。理想の世界について見れば、次のような例を擧げることができよう。

#### 1 仙境

斜溪橫桂渚

斜溪 桂渚を横ぎり

小徑入桃源

小徑 桃源に入る

〔王績「遊仙四首」其三、『全唐詩』卷三七)

これは仙境に遊ぶ詩で、仙境を「桃源」と呼んでいる。ほかに、「浮世度千載、桃源方一春」(于武陵「贈王道士」、『全唐詩』卷五九五)のような例もある。

#### 2 隠者の住まい

桃源定在深處

桃源 定めて深處に在らん

澗水浮來落花

澗水 浮びて落花來る

〔劉長卿「尋張逸人山居」、『劉隨州詩集』卷八)

これは隠者の住まいを訪れた詩で、山中の住まいを「桃源」と言っている。「寂寂孤鶯啼杏園、寥寥一犬吠桃源」(劉長卿「過鄭山人所居」、『劉隨州詩集』卷八)なども同様の例である。

3 山の中の静かな世界

如行武陵暮 武陵の暮に行くがごとし  
欲問桃源宿 桃源の宿を問わんと欲す

(杜甫「赤谷西崦人家」、『杜詩詳註』卷七)

秦州(甘肅省天水市)の崦嵫山の人家に宿泊するのをいう。この句の前に、「鳥雀依茅茨、藩籬帶松菊」とあり、山の中の家の静かなたずまいを詠じている。

4 佛寺・道觀

徘徊未能去 徘徊して未だ去ること能わず  
畏共桃源隔 桃源と共に隔たるを畏る

(劉長卿「奉陪蕭使君入鮑達洞尋靈山寺」、『劉隨州詩集』卷六)

これは詩題にある通り、靈山寺について述べている。道觀について述べた例では、「桃源數曲盡、洞口兩岸折」(錢起「尋華山雲臺觀道士」、『錢考功集』卷二)などがある。

5 景色のよいところ

茅屋還堪賦 茅屋 還た賦するに堪えたり  
桃源自可尋 桃源 自ら尋ぬべし

(杜甫「春日江村五首」其一、『杜詩詳註』卷一四)

永泰元年(七六五)の作。成都の浣花溪の景勝地を遊覽するのをいう。ほかに、「曾逢異人説、風景似桃源」(楊發「南溪書院」、『全唐詩』卷五一七)などがある。

6 故郷

故山多藥物 故山 藥物多く、  
勝概憶桃源 勝概 桃源を憶う

(杜甫「奉留贈集賢院崔于二學士」、『杜詩詳註』卷二)

天寶十一載(七五二)の作。「三大禮賦」を玄宗に認められたが、試験に落第し、長安から故郷に歸るとき詩。景色のよい故郷を思ふのをいう。崔は、崔國輔、于は、于休烈。

右のほかに、「去去桃花源、何時見歸軒」(李白「博平鄭太守自廬山千里相尋、入江夏北市門見訪、却之武陵、立馬贈別」、『李太白全集』卷一一)のような例がある。鄭太守が武陵に行くのを送別する詩。ここでは、桃花源の故事に基づいて、「桃花源」を武陵の代名詞に用いている。

次に、桃花源が望ましくない場所を表わす例を見ることにしよう。いずれも、意表をついた用例で、注目に値する。

1 官人の入道の場所

霄漢九重辭鳳闕 霄漢 九重 鳳闕を辭し  
雲山何處訪桃源 雲山 何れの處にか桃源を訪ねん

(戴叔倫「漢宮人入道」、『全唐詩』卷二七三)

白髪で宮門を出る宮女の悲しみを歌う詩。入道の場所をあえて「桃源」と呼ぶことで、悲しみを慰めているのだろう。

2 左遷の場所

謫官桃源去 官を謫せられて桃源に去り  
尋花幾處行 花を尋ねて幾處に行く

(李白「贈從弟南平太守之遼二首」其二、『李太白全集』卷一一) 南平太守が過度の飲酒のために、武陵に左遷されることを歌う。この句の後に、「秦人如舊識、出戶笑相迎」とあり、そこで歓迎を受けようすを描いている。

重見太平身已老 重ねて太平を見るも身已に老いたり  
桃源久住不能歸 桃源 久しく住みて歸る能わず

(杜甫「奉留贈集賢院崔于二學士」、『杜詩詳註』卷二)

〔劉長卿〕會赦後酬主簿所問、『劉隨州詩集』卷八)

上元二年(七六一)、春の作。潘州南巴(廣東省茂名市)の尉に左遷されていたのを許されたことを歌う。年老いて桃源から歸れないと言っているのを見ると、「桃源」ということばには、自嘲の氣持がこめられているかも知れない。

桃花洞裏○○○○ 家を擧げて去る  
此別相思復幾春 此の別れ 相思 復た幾春

(錢起「送畢侍御謫居」、『錢考功集』卷三)

畢曜が黔中に左遷されることを歌う。この詩の中に、「寧嗟人世棄虞翻、且喜江山得康樂」という句がある。虞翻は、三國時代の呉の人で、交州に左遷される。康樂は、六朝・宋の謝靈運で、永嘉太守に左遷され、山水の美を詩に詠じた。左遷されたところにも、山水を遊覽する樂しみがある。だから、そこを「桃花洞」と呼ぶのだろう。

桃花源が望ましくない場所を表わす例は、北周の庾信にあり、異郷に暮らす悲しみをこめていた。そのような例が唐詩になって増加するのは、唐代の詩人たちが桃花源の新しいイメージを追究した結果と言えよう。とりわけ、左遷された場所を桃花源と見なす用法に注意したい。本来、左遷の場所が望ましいわけではない。だが、そこに喜びの要素が加われば、事態は一變する。李白と錢起の用例では、左遷という悲觀の要素と、樂觀の要素(歡迎・遊覽)を結合することによって、桃花源の新しいイメージを創出することに成功している。

なお、桃花源に自己の境涯への嘆きをこめた庾信の用法を繼承したのは、杜甫である。杜甫の詠じる桃花源は、どこにもない場所・手に入らない世界で、不遇感の表明と結びついている。

緬思桃源内 緬ほかに桃源の内を思い

唐詩に見る桃花源

益歎身世拙 益々身世の拙なるを歎く

(杜甫「北征」、『杜詩詳註』卷五)

至德二載(七五七)、鳳翔の行在所から鄜州の家族のもとに赴くときの作。桃源ははるかに遠いといい、不遇な一生を嘆く。

多壘滿山谷 多壘 山谷に滿ち  
桃源何處求 桃源 何處に求めん

(杜甫「不寐」、『杜詩詳註』卷一七)

大曆元年(七六六)、夔州の西閣での作。眠れない理由を述べるもので、戰亂のために平和な場所がどこにもないのをいふ。

桃花源によって、理想の世界ではなく、望ましくない場所を表わす用例が唐代になって増加するのは、唐代の詩人の世界觀の變化を示すものでもある。桃花源が望ましくない場所の比喩に用いられるようになるのと對應して、桃花源は必要ないというもの、言い換えれば桃花源との訣別を詠じる用例が現われる。次にそれを擧げてみよう。

① 聞說桃源好迷客 聞き説なく 桃源 迷客を好むと  
不如高臥眊庭柯 高臥して庭柯を眊ぼむるに如かず

(裴迪「春日與王右丞過新昌里訪呂逸人」、『全唐詩』卷一二九)  
桃源郷で道に迷うより、のんびり寝ころんで庭の木を眺めていた方がよいと歌う。

② 何必桃源裏 何ぞ必ずしも桃源の裏  
深居作隱淪 深居して隱淪を作さん

(祖詠「清明宴司勳劉郎中別業」、『全唐詩』卷一三二)  
劉郎中の別莊について述べたもので、桃源の仙境にこもって、世間から逃れる生活をする必要はないと歌う。この別莊が桃源にほかならないというのである。

③方從桂樹隱 方まきに桂樹の隱に従う

不羨桃花源 桃花源を羨まず

(李白「聞丹丘子於城北山營石門幽居、中有高鳳遺跡、僕離群遠

懷、亦有棲遁之志、因敍舊以寄之」、『李太白全集』卷一三)

丹丘子の隱遁について述べる。「桂樹隱」は、『楚辭』招隱士に、「桂

樹叢生兮山之幽」とあるのに基づく。

④桃源君莫愛 桃源 君愛する莫れ

且作漢朝臣 且はらく作れ 漢朝の臣

(劉長卿「題大理黃主簿湖上高齋」、『劉隨州詩集』卷四)

黃主簿の湖上ののどかな住まいについていう。

⑤桃源寧異此 桃源 寧ぞ此に異ならん

猶お世間に聞ゆるを恐る

(戴叔倫「晚望」、『全唐詩』卷二七三)

山の中の靜かな住まいについて述べる。桃源は「こと變わらないと

いう。

⑥春花正夾岸 春花 正に岸を夾む

何必問桃源 何ぞ必ずしも桃源を問わん

(戴叔倫「過友人隱居」、『全唐詩』卷二七三)

友人の住まいが桃源と同じ環境にあるのをいう。だから、桃花源な

ど必要ない。

⑦仙路迷人應有術 仙路 人を迷わす 應まに術有るべし

桃源不必在深山 桃源 必ずしも深山に在らず

(李涉「贈長安小主人」、『全唐詩』卷四七七)

桃源は深い山の中にあるとは限らないこと、つまり長安にも仙境が

あるのをいう。

⑧莫見時危便乘興 時の危きを見て便ち興に乗ずること莫れ

人來何處不桃源 人來らば何處か桃源ならざらん

(羅隱「送程尊師之晉陵」、『甲乙集』卷九)

危険な時代を逃れて桃源に遊ぶ。そういうことをする必要はなく、

人が集まるところはどこでも桃源になるという。ここでは、桃源は決

して特別な場所ではなく、ありふれた場所とされている。

⑨皆言洞裏千株好 皆言う 洞裏 千株好しと

未勝庭前一樹幽 未だ庭前の一樹の幽なるに勝らず

(韋莊「庭前桃」、『浣花集』卷九)

桃源のたくさんの桃の木より、庭の一本の桃の木の方がよいのをい

う。

右に挙げた用例には、桃花源をひとつの理想郷と見なして、それへ

のあこがれを歌うような内容は見られない。①「A不如B」②「A未

勝B」などの比較表現によって、桃花源の價值はおとしめられ、③

「何必」④「寧」の反語表現や、⑤「不羨」④「莫愛」の否定表現に

よって、桃花源の價值が否定される。また、⑧「何處不」の二重否定

によって、桃花源の存在が平凡なものに相對化されてしまう。これら

は、桃花源に對する認識の變容を物語っている。桃花源はもはや

やあこがれの世界ではなくなつた。日常生活の中でも獲得できること

が分かつたからである。言い換えれば、「どこにもない場所」から、「ど

こにもある場所」へと變つた。右の中には、盛唐期の用例も見ら

れるが、とりわけ中唐以後になつて、桃花源を否定的なベクトルで歌

う例が増加することに注意しなければならない。それは、盛唐期の安

定した世界觀の崩壞を示すものにほかならず、ひとつの世界觀の崩壞

が新たな認識の展開をもたらしたのである。

#### 四 「桃源行」の變容

桃花源を題材とした作品に、盛唐の王維「桃源行」、および中唐の韓愈「桃源圖」、劉禹錫「桃源行」がある。次に、これらの作品を比較しながら、盛唐から中唐にかけての認識の變容を確認しておきたい。

(1) 王維「桃源行(時年十九)」(趙殿成『王右丞集箋注』卷六)

1 漁舟逐水愛山春 漁舟 水を逐いて山の春を愛し

兩岸桃花夾去津 兩岸の桃花 去津を夾む

坐看紅樹不知遠 坐ろに紅樹を見て遠きを知らず

行盡青溪不見人 行きて青溪を盡くして人を見ず

5 山口潛行始隈隩 山口より潛行すれば始めは隈隩

山開曠望旋平陸 山開けて曠望 旋ち平陸

遙看一處攢雲樹 遙かに看る 一處 雲樹を攢むるを

近入千家散花竹 近く入れば 千家 花竹を散す

樵客初傳漢姓名 樵客 初めて漢の姓名を傳え

10 居人未改秦衣服 居人 未だ秦の衣服を改めず

居人共住武陵源 居人 共に武陵源に住み

還從物外起田園 還た物外に従って田園を起こす

月明松下房櫺靜 月明らかにして松下房櫺靜かに

日出雲中鷄犬喧 日出でて雲中 鷄犬喧し

15 驚聞俗客爭來集 驚きて俗客を聞きて争いて來り集まり

競引還家問都邑 競いて引きて家に還り都邑を問う

平明閭巷掃花開 平明 閭巷 花を掃いて開き

薄暮漁樵乘水入 薄暮 漁樵 水に乗じて入る

初因避地去人間 初め地を避くるに因りて人間を去り

20 更聞成仙遂不還 更に仙と成るを聞きて遂に還らず

峽裏誰知有人事 峽裏 誰か知らん 人事有るを

世中遙望空雲山 世中 遙かに望めば 雲山空し

不疑靈境難聞見 靈境の聞見し難きを疑わざるも

塵心未盡思鄉縣 塵心 未だ盡きず 鄉縣を思ふ

25 出洞無論隔山水 洞を出でて山水を隔つるを論ずる無く

辭家終擬長游衍 家を辭して終に長く游衍せんと擬す

自謂經過舊不迷 自ら謂う 經過 舊より迷わずと

安知峰壑今來變 安んぞ知らん 峰壑 今來變ずるを

當時只記入山深 當時 只だ記す 山に入ること深く

30 青溪幾度到雲林 青溪 幾度か雲林に到るを

春來徧是桃花水 春來 徧く是れ桃花の水

不辯仙源何處尋 仙源を辯せず 何處に尋ねん

王維の「桃源行」は、三つの段落に分けることができる。また、七

回換韻しているので、韻の區切りに従って、内容を整理してみよう

(韻字は、平水韻による)。

第一段落は、一、四句の全四句で、漁師の船が桃花源に迷いこむこ

とを述べている。水源を尋ねて春の山を行くと、兩岸には桃の花が咲

き、赤い木を眺めているうちに、青い谷川が行き止まりになってし

まったという。(一・二・四句 上平十一真)

第二段落は、五、二二句の全一八句で、桃花源の描寫である。この

部分はさらに四つに分けることができる。

1五、一〇句の全六句は、桃花源にたどり着くことを述べている。山

の入口からもぐっていくと、はじめは入り組んでいたが、山が開け

て廣々とした眺めになり、高い木が一箇所に集まった村落に花と竹

が散在している。きこりが漢の王朝の姓名を告げても、住人は秦の衣服のままだったという。「桃花源記」の「漁人」は、ここでは「樵客」(きこり)となっている。(五・六・八・一〇句 入聲一屋)

2 一一〜一四句の全四句は、俗世間から離れた、靜かで平和な生活を描いている。月の明るい夜は、松の下の格子窓もひっそりして、日が出ると、雲の中に鶏や犬の聲がにぎやかだ、と詠じる二三・一四句など、王維の田園詩のひとつまを思わせる。(一一・一二・一四句 上平十三元)

3 一五〜一八句の全四句は、きこりの來訪を聞いて人々が集まり、家に連れて歸って接待すること、および花と水のある美しい村の風景を描いている。(一五・一六・一八句 入聲十四緝)

4 一九〜二二句の全四句は、俗世間との隔絶を述べている。初めは爭亂を避けるために世間を離れたが、仙人になる方法を聞いてから歸らなかつた。峽谷の中で人が暮していることを、俗界の人は誰も知らず、世間から眺めても、雲のかかった山しか見えないという。(一九・二〇・二二句 上平十五刪)

第三段落は、二三〜三二句の全一〇句で、桃花源を去ることを述べている。この部分は、二つに分けることができる。

1 二三〜二八句の全六句は、きこりに望郷の思いが生じ、異境を出るのをいう。きこりは洞窟を出たら、どんなに遠くても、もう一度訪れるつもりだった。だが、このときには、峰と谷の風景は變わり果て、見分けられないようになっていたのである。(二三・二四・二六・二八句 去聲十七霽)

2 二九〜三二句の全四句は、再訪の可能性をいう。山の奥深くに入り、青い谷川を進んで林にたどり着いたことを覺えているだけで、

春になるとどこにも桃の花を浮かべた川が流れ、仙人の住みかか區別がつかないと述べている。(二九・三〇・三二句 下平十二侵)

王維の「桃源行」は、漁師の船が桃花源に迷いこむ描寫から始まり、次いで桃花源の描寫に筆を費やし、最後に桃花源を去る描寫で締めくくっている。この構造は、陶淵明の「桃花源記」をほぼ踏襲していると言つてよい。二三・二四句「不疑靈境難聞見、塵心未盡思鄉縣」から明らかなように、きこりに望郷の思いが生じることはあつても、桃花源の存在はまったく疑われていない。最後の二句で、「春來偏是桃花水、不辯仙源何處尋」と詠じるのも、桃花源へのあこがれを裏側から表現したものである。

(2) 韓愈「桃源圖」(『昌黎先生集』卷三)

- |            |             |                 |
|------------|-------------|-----------------|
| 1 神仙有無何渺茫  | 桃源の說 誠に荒唐たり | 神仙の有無 何ぞ渺茫たる    |
| 流水盤迴山百轉    | 生綯數幅垂中堂     | 桃源の說 誠に荒唐たり     |
| 武陵太守好事者    | 題封遠寄南宮下     | 流水盤迴して山百轉       |
| 南宮先生忻得之    | 波濤入筆驅文辭     | 生綯 數幅 中堂に垂る     |
| 文工畫妙各臻極    | 架巖鑿谷開宮室     | 武陵の太守 好事の者      |
| 10 異境恍惚移於斯 | 接屋連牆千萬日     | 題封して遠く南宮の下に寄す   |
| 巖巖鑿谷開宮室    | 羸顛劉蹶了不聞     | 南宮先生 之を得るを忻び    |
| 接屋連牆千萬日    | 地坼天分非所恤     | 波濤 筆に入りて文辭を驅る   |
| 羸顛劉蹶了不聞    |             | 文工に畫妙にして各々極に臻り  |
| 地坼天分非所恤    |             | 異境 恍惚として斯に移る    |
|            |             | 巖に架し谷を鑿ちて宮室を開き  |
|            |             | 屋を接し牆を連ぬること千萬日  |
|            |             | 羸顛り劉蹶きて了に聞かず    |
|            |             | 地坼け天分かるも恤うる所に非ず |

15 種桃處處惟開花

川原近遠蒸紅霞

初來猶自念鄉邑

歲久此地還成家

漁舟之子來何所

20 物色相猜更問語

大蛇中斷喪前王

群馬南渡開新主

聽終辭絕共悽然

25 當時萬事皆眼見

自說經今六百年

不知幾許猶流傳

爭持酒食來相饋

禮數不同罇俎異

月明伴宿玉堂空

30 骨冷魂清無夢寐

夜半金鷄嘯嘶鳴

火輪飛出客心驚

人間有累不可住

35 依然離別難為情

船開棹進一迴顧

萬里蒼蒼煙水暮

世俗寧知偽與真

至今傳者武陵人

桃を種えて處處に惟れ花を開き

川原 近遠 紅霞を蒸す

初め來りて猶お自ら郷邑を念い

歲久しくして此の地に還た家を成す

漁舟の子 何れの所より來る

物色 相猜うがいて更に問語す

大蛇 中斷して前王を喪い

群馬 南渡して新主を開く

聽き終り辭絶えて共に悽然たり

自ら説く 今に經ること六百年

當時 萬事 皆眼に見るも

幾許か猶お流傳するを知らずと

争いて酒食を持して來りて相饋あかり

禮數 同じからず 罇俎異なり

月明らかにして伴われて玉堂の空しきに宿し

骨冷やかに魂清くして夢寐無し

夜半 金鷄 嘯嘶として鳴き

火輪 飛び出でて客心驚く

人間 累有り 住まるべからず

依然として離別 情を爲し難し

船開き棹進みて一たび迴顧すれば

萬里 蒼蒼として煙水暮る

世俗 寧ぞ知らんや 偽と真と

今に至りて傳うる者は武陵の人

唐詩に見る桃花源

韓愈の「桃源圖」は、元和八年（八一三）の作。三つの段落に分け

て考える。この作品は、王維の「桃源行」よりも換韻の仕方が細かい。韻の區切りに基づいて、内容を整理しておく。

第一段落は、一〜一〇句の全一〇句で、桃源の圖について述べている。この部分は、さらに三つに分けることができる。

1一〜四句の全四句は、作者の意見と桃源の圖の説明である。神仙の存在を疑い、桃源の傳説はでたらめと述べている。水と山を描いた、數幅のきぎぬが座敷の中央にかかっている。これが桃源の圖である。(一・二・四句 下平七陽)

2五・六句の全二句は、桃源の圖の贈り主、すなわち武陵の太守について述べている。この人が、南宮すなわち尙書省まで送ってよしたのである。陳景雲『韓集點勘』卷一によれば、太守は、寶常を指す。劉禹錫「武陵北亭記」(瞿蛻園『劉禹錫集箋證』卷九)に、元和七年の冬、寶常が武陵の太守に命じられたとある。(五・六句 上平二馬)

3七〜一〇句の全四句は、南宮先生が詩を作ること述べている。陳景雲『韓集點勘』卷一によれば、南宮先生は、盧汀を指す。韓愈と盧汀には唱和詩があり、元和六年の「酬司門盧四兄雲夫院長望秋作」(昌黎先生集)卷五)では、盧汀を司門と稱している。司門は、尙書省の刑部に屬するので、南宮先生と呼んだのであろう。桃源圖の大波が筆に乗り移ったように詩が出來上がって、文も畫も究極の境地に達し、桃源郷の別世界がここに移動したという。(七・八・一〇句 上平四支)

第二段落は、一一〜三〇句の全二〇句で、ここからが桃花源の描寫となる。この部分はさらに五つに分けることができる。

1一〜一四句の全四句は、世間との隔絶をいう。谷を切り開いて住



まいを作り、秦・漢の滅亡や、魏・晉の亂も知らないと述べている。(一一・一二・一四句 入聲四質)

2 一五〜一八句の全四句は、桃花源に住み着いたことをいう。桃が花を開いて、川原に紅いかすみがかすみが立ち上るようすと、初めは故郷を思い出したが、年月とともに落ち着き、家を構えたことを述べている。(一五・一六・一八句 下平六麻)

3 一九〜二二句の全四句は、漁師が村人の質問に答えて、世の中の變化を知らせることを述べている。二二句は、漢の高祖が大蛇を二つに切つて、秦の天子が滅んだこと(『漢書』卷一上・高帝紀)、二二句は、司馬氏の諸王が南に渡つて、新しい天子(元帝)が立ったこと(『晉書』卷六・元帝紀)をいう。(一九・二〇句 上聲六語、二二句 上聲七麌)

4 二三〜二六句の全四句は、漁師の話を聞いた村人の感想を述べている。昔のことは今では傳わらないだろうという。(二三・二四・二六句 下平一先)

5 二七〜三〇句の全四句は、漁師が村人の接待を受けて宿泊したことを述べている。禮儀作法の決まりや食器も普通とは異なっていた。村人に連れられて、誰もいない玉堂、つまり仙人の住まいに泊まり、骨まで冷え魂も清められて、眠ることができなかったという。(二七・二八・三〇句 去聲四質)

第三段落は、三一〜三八句の全八句で、桃花源を去ることを述べている。この部分は、三つに分けられるだろう。

1 三一〜三四句の全四句は、漁師の旅立ちを述べている。夜中に金色の鶏が鳴き聲を上げ、太陽が飛び出す異様な光景を描いて、浮き世の束縛と別離の情に觸れている。「金鶏」は、漢・東方朔『神異經』

東荒經に見える語。(三一・三二・三四句 下平八庚)

2 三五・三六句の全二句は、歸路について述べる。船が出發してから後ろを振り向けば、どこまでも青々として、もやかにかすむ水面に夕暮れが迫っていたという。再訪の不可能性を暗示しているだろう。(三五・三六句 去聲七遇)

3 三七・三八句の全二句は、作者の意見を述べる。桃源のことを傳えるのは武陵の人だけなのだから、世間の人に眞實は分らないという。この武陵の人の中に、武陵の太守が含まれることになる。(三七・三八句 上平十一真)

韓愈の「桃源圖」は、題名が示す通り、繪を見て作った詩である。陶淵明の「桃花源記」に基づいてはいるが、第一段落では、漁師が桃花源に迷いこむ描寫を削除し、桃源圖の説明から始めている。これは、「桃花源記」の枠組みを破壊しようとする意圖の表われと考えることができよう。冒頭に、「神仙有無何渺茫、桃源之説誠荒唐」と述べているのを見ても、韓愈には王維ほど桃花源の存在は信じられていない。また、二九三〇句に「月明伴宿玉堂空、骨冷魂清無夢寐」とあるように、桃花源は骨まで凍るような冷たい世界として描かれ、そこに同化しきれない韓愈の心情を傳えている。いやむしろ、韓愈は桃源の説を否定することによって、みずからの桃花源を想像力によって再構築しようと言っているかも知れない。三一・三二句「夜半金鶏啼晰鳴、火輪飛出客心驚」の怪奇的なイメージは、まさしく韓愈が創造した桃花源にふさわしい。韓愈にとつての桃花源は、「桃花源記」から逸脱するところに意味があったのである。

(3) 劉禹錫「桃源行」(瞿蛻園『劉禹錫集箋證』卷二六、上海古籍出版社、一九八九)

1 漁舟何招招

浮在武陵水

拖綸擲餌信流去

誤入桃源行數里

5 清源尋盡花綿綿

踏花覓徑至洞前

洞門蒼黑煙霧生

暗行數步逢虛明

俗人毛骨驚仙子

10 爭來致詞何至此

須臾皆破冰雪顏

笑言委曲問人間

因嗟隱身來種玉

不知人世如風燭

15 筵羞石髓勸客餐

鑿蘇松脂留客宿

雞聲犬聲遙相聞

曉光蔥籠開五雲

漁人振衣起出戶

20 滿庭無路花紛紛

翻然恐迷鄉縣處

一息不肯桃源住

桃花滿溪水似鏡

塵心如垢洗不去

25 仙家一出尋無蹤

仙家一たび出づれば

漁舟 何ぞ招招たる

浮びて武陵の水に在り

綸を拖き餌を擲ち流れに信せて去り

誤りて桃源に入りて行くこと數里

清源 尋ね盡くして花綿綿

花を踏み徑を覓めて洞前に至る

洞門 蒼黑として煙霧生じ

暗行すること數歩 虛明に逢う

俗人の毛骨 仙子を驚かし

争い來りて詞を致す 何ぞ此に至ると

須臾にして皆冰雪の顔を破り

笑言して委曲に人間を問う

因りて嗟く 身を隠し來りて玉を種え

人世の風燭のごときを知らざるを

筵に石髓を差めて客に勸めて餐せしめ

鑿に松脂を熱やして客を留めて宿せしむ

雞聲 犬聲 遙かに相聞え

曉光 蔥籠として五雲を開く

漁人 衣を振いて起ちて戸より出づれば

滿庭 路無く花紛紛たり

翻然として郷縣の處に迷うを恐れ

一息も肯えて桃源に住まらず

桃花 溪に滿ち 水 鏡に似たり

塵心 垢のごとく 洗えども去らず

仙家 一たび出づれば 尋ぬるも蹤無く

至今水流山重重 今に至るまで水流れ山重重たり

劉禹錫の「桃源行」は、形式的には「桃花源記」の構造を踏襲しているの、三つの段落に分けることができる。換韻している箇所注目し、韻の區切りに基づいて、適宜ひとまとめにしながら内容を整理しておく。

第一段落は、一〜八句の全八句で、漁師の船が桃花源に迷いこむことを述べている。この部分は、さらに三つに分けることができる。

1一〜四句の全四句は、漁師の船が武陵の水に浮かび、釣りをしているうちに、桃源に迷いこむことをいう。(二・四句 上聲四紙)

2五・六句の全二句は、水源を探り當ると、桃の花が咲き亂れ、花を踏みながら道を探して、洞窟の前に着いたことをいう。(五・六句 下平一先)

3七・八句の全二句は、もやのかかった洞窟の暗闇を抜け、廣く明るい場所に出たことをいう。(七・八句 下平八庚)

第二段落は、九〜二〇句の全一二句で、桃花源の描寫となっている。この部分は、さらに四つに分けることができる。

1九・一〇句の全二句は、俗人(漁師)と仙人の對面を述べる。俗人の容貌が仙人を驚かし、どうして來たのかと尋ねている。(九・一〇句 上聲四紙)

2一一・一二句の全二句は、仙人が嬉しそうに、世間のことを尋ねるのをいう。「冰雪顔」は、『莊子』逍遙遊第一で、藐姑射の仙人について、「肌膚若冰雪」と述べているのに基づく。(一一・一二句 上平十五刪)

3一三〜一六句の全四句は、仙人が世を避けて暮らしていたので、世の中のはかなさに氣づかなかつたのを嘆いたことと、客を接待して

宿泊させたことをいう。「石髓」「松脂」はともに、仙人の食物。(一三・一四句 入聲二沃、一六句 入聲一屋)

4一七〜二〇句の全四句は、夜明けの光景を述べる。鶏と犬の聲で夜が明けると、朝の光が青く射して、五色の雲が開ける。漁師が戸外に出ると、庭いっぱい花が咲き亂れていたという。(一七・一八・二〇句 上平十二文)

第三段落は、二二〜二六句の全六句で、漁師が桃花源を去ることを述べている。この部分は、二つに分けることができる。

1 二二〜二四句の全四句は、漁師が望郷の念に驅られて、桃花源と訣別するのをいう。「桃花」と「塵心」の對比は、仙界と俗界の溝の深さを暗示しているだろう。(二二・二四句 去聲六御、二二句 去聲七遇)

2 二五・二六句の全二句は、再訪の不可能性を述べている。仙人の住みかは、ひとたび離れてしまえば、探し出すことはできず、水と山にさえぎられていることをいう。(二五・二六句 上平二冬)

劉禹錫の「桃花源」は、漁師が桃花源に迷いこむ描寫から始まり、桃花源の描寫が中心にあり、漁師が桃花源を去るところで描寫を終えている。この構造は、陶淵明の「桃花源記」の枠組みを踏まえている。だが、内容に關して言えば、「桃花源記」と同日に論じることができる。陶淵明にとって、桃花源はあこがれの世界だった。それに対して、劉禹錫の場合はどうだろうか。一三・一四句「因嗟隱身來種玉、不知人世如風燭」のように、仙人は身を隠したことを嘆き、二一・二二句「翻然恐迷鄉縣處、一息不肯桃源住」のように、漁師は故郷に歸れなくなるのを心配して、決然と桃花源を辭去している。また、二四句「塵心如垢洗不去」から明らかのように、桃花源は俗人が

同化できない世界として描かれている。王維が「桃花源」で「塵心未盡思鄉縣」と述べたとき、桃花源へのあこがれがなかったわけではない。だが、劉禹錫が「塵心如垢洗不去」というとき、すでに桃花源を美化する気持ちは消えている。劉禹錫は桃花源の價値を絶對的なものと見なしていない。韓愈は「桃花源記」の枠組み自體を破壊したが、劉禹錫は枠組みを維持しながら、桃花源そのものを相對化したと言えよう。

## 五 非充足の快樂をめぐって

中唐期になると、桃花源は絶對に必要なものではなくなった。そこに到達できなくてもよいと考えるようになった。このような傾向は、非充足の快樂と呼ぶことができよう。非充足の快樂を表現するものに、「尋隱者不遇」詩がある。

石川忠久氏は『尋隱者不遇』詩の生成について「『陶淵明とその時代』」研文出版、一九九四)の中で、この逆説的な妙味をねらう詩の分野が、隱逸詩の展開とともに生成した過程を論じている。石川氏によれば、東晉から六朝末にかけて、「期不至」(約束した友人が來ない)という逆説的命題が定型化し、「送不及」(送別に間に合わない)などの變化型が生まれた。こうした逆説的な詩題の開発と、道觀佛寺を尋ねる詩の出現が融合した結果、盛唐から中唐にかけて「尋隱者不遇」詩が多く作られるようになったという。「尋隱者不遇」詩の斬新さは、目的を達成できないこと、つまり非充足の状態を嘆くのではなく、そこに價値を認める考え方にあるだろう。このような傾向の詩をいくつか挙げてみる。

1 杜甫「承沈八丈東美除臚部員外郎、阻雨未遂馳賀、奉寄此詩」(杜

詩詳註』卷三)。沈東美(沈佺期の子)が膳部員外郎に就任したことを聞いたが、雨に妨げられてお祝いにいけないというもの。天寶十三載(七五四)の作。この詩で杜甫は、沈東美の出世を祝福しながら、貧賤の自己と對比している。お祝いにいけないから、貧賤の告白ができたのである。

2 杜甫「阻雨不得歸灑西甘林」(『杜詩詳註』卷一九)。雨に妨げられて、灑西のみかん林に歸れないというもの。大曆二年(七六七)七月の作。暑い時期が過ぎ長雨に變わって、灑西に歸れなくなり、東城にたたずみながら、果樹園の弱ったみかんのことを心配し、雨がやんで歸れるようになりたいと述べている。このとき杜甫は、白帝城に行っていて、歸れなくなった。歸れなくなったからこそ、みかんをいたわる氣持ちが強まっている。

3 韋應物「張彭州前與緱氏馮少府各惠寄一篇、多故未答、張已云沒、因追哀敘事、兼遠簡馮生」(『韋江州集』卷六)。張旣と、緱氏(河南)の馮著から詩を贈られ、事情があつて返事を書かないうちに、張旣が死んだ。そこで哀悼の意を述べながら、馮著に手紙を書いたというもの。滁州の作。張旣が司封郎中、知制誥を務めていたことから説きはじめ、韋應物が尙書省比部員外郎から滁州刺史に出されたことなどを述べ、その後、張旣の死を悼む。この中で、手紙の字が過去の人のものとなったのを悲しんでいる。返事を書く前に相手が死んだので、故人をしるぶ氣持ちが強まることになる。

4 許渾「宣城崔大夫召聯句、偶疾不獲赴、因獻」(『丁卯集』卷上)。宣城の崔龜從から聯句の會に招かれたが、病氣で出席できないというもの。この詩で、不如意な境遇を傷みながら、出世の願望を述べている。それは、聯句の會に参加していれば、言えることではな

かつたろう。なお、聯句ができないことを詠じる例は、何遜「答江革聯句不成」(『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷九)、江革「贈何記室聯句不成詩」(同)などがある。

5 韓偓「訪隱者遇沈醉書其門而歸」(『玉山樵人集』七言絶)。隱者を訪問したが、酔っぱらっていたので、門に詩を書きつけて歸ったというもの。隱者に會えないのではなく、酔っていたので歸ってきたというところに、おかしさがにじみ出ている。

右の用例には、盛唐の杜甫の作品もあるが、むしろ先驅的な用例と見なせよう。このような傾向の詩が文學史的な意味を持つようになるのは、中唐以後のことである。「尋隱者不遇」詩も、中晚唐になって數が増加する。こうした否定的な命題に詩人が關心を示すようになるのは、非充足という状態に價値を認める世界觀が確立していたからだとと思われる。桃花源を相對化する傾向が生じたのも、同じような理由によるものだろう。

## 六 おわりに

外に向かつて理想を求める盛唐期とは異なり、中唐期には内觀の傾向が強まった。桃花源詩の變質は、そのような時代の産物でもあった。例えば、韓翃「同題仙游觀」(『全唐詩』卷二四五)に次の句がある。

何用別尋方外去 何ぞ用いん 別に方外を尋ね去るを

人間亦自有丹丘 人間 亦自ずから丹丘有り

道觀を詠じる詩で、ことさらこの世の外に尋ねて行く必要はない、人の世にも仙境はある、と言っている。この句は、李白「山中問答」(『李太白全集』卷一九)の中の、「桃花流水窅然去、別有天地非人間」

をひねったものである。「方外」、つまり「非人間」から、「人間」の地平に、桃花源を引きずりおろしたことになる。白居易「重題」其三（朱金城『白居易集箋校』卷一六、上海古籍出版社、一九八八）の次の句も、ほとんど同じことを言っている。

心泰身寧是歸處 心泰く身寧きは是れ歸る處

故郷何獨在長安 故郷は何ぞ獨り長安にのみ在らんや

元和十二年（八一七）、江州司馬のときの作。廬山（江西省九江市）の香爐峰に草堂を築いた心境を述べる。心と體の健康が大事で、長安だけが故郷ではないという。「何用別尋方外去」と「故郷何獨在長安」、「人間亦自有丹丘」と「心泰身寧是歸處」の類似は、見やすいだろう。人間に丹丘が存在するように、白居易は心の中に故郷（＝疑似長安）を作り出したのである。

赤井益久「白詩風景小考——『竹窓』と『小池』を中心として——」  
 『國學院雜誌』第九七卷一號、一九九六）は、小風景の意味と處世觀の變化について論じたもので、大曆期から元和期にかけて處世觀の上で大きな變轉があったこと、および小の中に大を觀る立場が、この時代の共通認識であったことを述べている。心の中に故郷を作り出すのも、小の中に大を觀る立場と云ってよい。それは、桃花源を日常の地平に引きずりおろす行爲に等しい。それが、白居易にとって自適の方法でもあった。非充足の状態に價値を認める傾向もまた、マイナスをプラスに反轉させるという意味で、小の中に大を觀る立場のひとつと見なすことができるだろう。したがって、それは逆説的な自適の方法とも言えるのである。

注

(1) 小西甚一『道——中世の理念』（講談社現代新書、一九七五）に、次のような指摘がある。引用は、『中世の文藝——「道」という理念』（講談社學藝文庫、一九九七）によった。

いくら美しくても、すっかり現われた状態での美には、感受できる限度がある。しかし、どこか充足していない感じの状態を對象としながら、それが充足されたときの美しさを心に思い描くとき、單に直接的な感受ではとうていありえないような美が生まれる。そういう非充足性が、すなわち「艶」の契機にほかならない。（四八頁）

(2) 例えば、三浦國雄『中國人のトボス——洞窟・風水・壺中天——』（平凡社選書一二七、一九八八）は、桃花源を洞天と見なし（「洞天福地小論」「洞庭湖と洞庭山——中國人の洞窟觀念」、中野美代子『ひょうたん漫遊録——記憶の中の地誌』（朝日選書四二五、一九九二）は、桃花源をひょうたんのイメージでとらえている（「長江をめぐるひょうたんシンボリズム——風水文化試論」。大室幹雄『桃源の夢想——古代中國の反劇場都市』（三省堂、一九八四）は、「反都市的アルカディア」（二五七頁）と言っている。歴代の桃源觀については、大矢根文次郎『陶淵明研究』（早稻田大學出版部、一九六七）を参照（七五六—七六二頁）。また、門脇廣文『陶淵明（桃花源記）小考——從來の理解とその問題点について——』（『大東文化大學漢學會誌』第三八號、一九九九）は、「桃花源記」の研究史をたどるのに役立つ。ほかに、比較文學の觀點からの論文に、芳賀徹『桃源郷の系譜』（辻理・芳賀徹編著『文學の東西』、日本放送出版協會、一九八八）がある。

(3) なお、「桃源」が妓女のいるところを指す用例がある。これは、陶淵明の「桃花源記」ではなく、六朝宋・劉義慶撰『幽明錄』に基づいている。『幽明錄』に、劉晨・阮肇が天臺山で仙女に會う話が載っていて、「遙望山上一桃樹」「有一群女來、各持五三桃子」のように、桃が出

てくる。この用例は晩唐の詩人にある。参考までに挙げておく。「何事  
桃源路忽迷、惟留雲雨怨空園」(張賁「和襲美醉中先起次韻」、《全唐詩  
卷六三》)。これは、皮日休(字は襲美)が酒に酔ったのをからかっ  
ている。「桃源洞口來否、絳節霓旌久留」(韓偓「六言三首」其三、「玉山  
樵人香奩集」六言律)。

(4) 官人の入道については、詹滿江『送官人入道』詩について(『日本  
中國學會創立五十年記念論文集』、汲古書院、一九九八)を参照。

(5) 杜甫の詩の用例が、みずからの不運・貧窮の嘆きとあわせて語られ  
ることが多いことについては、沼口勝氏の論文に指摘がある。

(6) 桃源詩に關する議論は、宋・胡仔『茗溪漁隱叢話』前集卷三・五柳  
先生上、宋・洪邁『容齋隨筆』三筆卷十・桃源行などを参照。

(7) 柴格朝「劉禹錫論」(京都産業大學言語研究會『ことばのアスペク  
ト』第四號、一九九〇)は、一九〇二句について、「桃源郷は憧憬に  
値するような世界ではない。嚴しい現實からの逃避は何ら根本的な解  
決にならず、結局は身を隠したことを嘆くしかからないのだから」と  
述べている。

(8) なお、宋の王安石にも「桃源行」(『臨川先生文集』卷四)がある。  
「上皇夷宮中鹿爲馬、秦人半死長城下。避時不獨商山翁、亦有桃源種桃  
者。5此來種桃經幾春、採花食實枝爲新。兒孫生長與世隔、雖有父子  
無君臣。漁郎漾舟迷遠近、10花間相見因相問。世上那知古有秦、山中  
豈料今爲晉。聞道長安吹戰塵、春風回首一霑巾。15重華一去寧復得、天  
下紛紛幾幾秦」。

この詩は三つの段落に分けることができる。第一段落は、一〜四句の  
全四句で、秦の暴政を批判している(一・二・四句 上聲二馬)。第  
二段落は、五〜一二句の全八句で、桃花源について述べている。この  
部分はさらに三つに分けられるだろう。1五〜八句の全四句は、階級  
のない社會を描き(五・六・八句 上平十一眞)、2九・一〇句の全二

唐詩に見る桃花源

句は、漁師の船が桃花源に迷いこんだことを述べ(九・一〇句 去聲  
十三問)、3一・一二句の全二句で、世俗と山中を對比している(一  
句 上平十一眞、二句 去聲十二震)。第三段落は、一三〜一六句  
の全四句で、戦亂の世に對する悲しみを述べている(一三・一四・一  
六句 上平十一眞)。

王安石の「桃源行」には、「桃花源記」の構造を踏襲しようとする意圖  
はまったく見られない。

(9) 今日西京掾、多除南省郎。通家惟沈氏、謁帝似馮唐。詩律群公問、  
儒門舊史長。清秋便寓直、列宿頓輝光。未暇申安慰、含情空激揚。司  
存何所比、臆部默懷傷。貧賤人事略、經過霖潦妨。禮同諸父長、恩豈  
布衣忘。天路牽駢驥、雲臺引棟梁。徒懷貢公喜、颯颯鬢毛蒼。

(10) 三伏適已過、驕陽化爲霖。欲歸灑西宅、阻此江浦深。壞舟百板坼、峻  
岸復萬尋。篙工初一棄、恐泥勞寸心。佇立東城隅、悵望高飛禽。草堂  
亂玄圃、不隔崑崙岑。昏渾衣裝外、曠絕同曾陰。園甘長成時、三寸如  
黃金。諸侯舊上計、厥貢傾千林。邦人不足重、所迫豪吏侵。客居暫封  
殖、日夜偶瑤琴。虛徐五株態、側塞煩胸襟。安得輟雨足、杖藜出岷嶽。  
條流數翠實、偃息歸碧潯。拂拭烏皮几、喜聞樵牧音。令兒快搔背、脫  
我頭上簪。

(11) 君昔掌文翰、西垣復石渠。朱衣乘白馬、輝光照里閭。余時忝南省、接  
燕婉空虛。一別守茲郡、蹉跎歲再除。常懷關河表、永日簡牘餘。郡中  
有方塘、涼閣對紅蕖。金玉蒙遠眺、篇詠見吹噓。未答平生意、已沒九  
原居。秋風吹寢門、長慟涕漣如。覆視緘中字、奄爲昔人書。髮鬢已云  
白、交友日彫疎。馮生遠同恨、憔悴在田廬。

(12) 心慕知音命自拘、畫堂聞欲試吹竽。茂陵罷酒慙中聖、漳浦題詩怯大  
巫。鬢鬢幾年傷在藥、羽毛終日羨棲梧。還愁旅棹空歸去、楓葉荷花釣  
五湖。

(13) 曉入江村覓釣翁、釣翁沈醉酒缸空。夜來風起閑花落、狼籍柴門鳥徑中。